

# 『将軍の世紀』を語る・前編



歴史学者 やまうち まさゆき  
東京大学名誉教授 **山内 昌之氏**

1947年生まれ。  
武蔵野大学国際総合研究所客員教授。モロッコ王国ムハンマド五世大学特別客員教授。富士通フューチャースタディーズ・センター特別顧問、アサガミ顧問。  
2023年より横綱審議委員会委員長。  
主要著書に『オスマン帝国とエジプト』、『スルタンガリエフの夢』、『岩波イスラーム辞典』(共編著)、『中東国際関係史研究』など。

歴史学者山内昌之氏の大著『将軍の世紀』が本年4月に刊行された。関ヶ原合戦から幕末までの政治中枢の姿が、圧倒的な臨場感で描かれている。10年近い歳月をかけて著された、江戸のダイナミックな世界の一端を著者に聞いた。

## 世界史的な政治家 徳川家康

### 尾張と三河が生んだ三偉人

信長、秀吉、家康は、軍人としても政治家としても日本史屈指の人物です。この3人のうち断然人気があるのは信長ですね。次が秀吉、そして家康。信長は恰好がよいし、秀吉には知恵がある。

しかし、政治家としてもっとも必要な条件を持っていた人物は家康です。忍耐力と説得力、陰謀にあらざる戦略的な手法で人々をまとめる力。長期的な視野と戦略性。それも一世代限りの戦略性や徳川家だけの戦略性ではない。日本が中世から抜け出して近世に向っていく時に、こういう国であるべきかはっきりしたビジョンを持っていました。

事論、政治外交論等、我々は彼から多くのことを学ぶことができます。また、戦国期に生きながら、憎悪や恨み、復讐心をしつかりと抑えることができました。カエサルやナポレオンと比べても決して劣らず、類まれな才能と資質です。

### 今川時代の基礎的訓練

家康は、実は大変な教養人でした。茶の湯や華道、詩文なども身に付けています。しかし、自ら教養をひけらかすことはなく、趣味に淫することもなかった。

今川義元のもとにいた時は、大原雪斎から教えを受けています。忍耐力と教養、そして学問。武將、大名となっていくうえでの基礎的訓練を受けたのです。

### 家康の器量が発揮された関ヶ原合戦

関ヶ原合戦で功績を挙げた黒田長政には、極秘の遺言があります。その中で、次のように言っています。「徳川方の東軍とは言え、主力は豊臣恩顧の武將ばかり。自分や福島正則、加藤嘉明、藤堂高虎らが組んで西軍についていたら、西軍が容易に勝つたのではないか」。当時の政情の緊迫感をよく表しています。

関ヶ原合戦は、武將、大名、政治家としての家康の総決算でした。「天下統一は内府、家康公なくしてあり得ない」。豊臣恩顧の大名を含めて、かなりのコンセンサスが出来上がっていたのです。そう思わせるだけの家康の器量が、東軍を勝利に導きました。大坂城から動こうともしなかった西軍の総大将毛利輝元では比較になりません。



家康公像

### 二重権力を終らせた大坂の陣

豊臣方の武将片桐且元は、坪内逍遙の『桐一葉』で有名です。方広寺の大仏開眼供養を中止させられた後、徳川と豊臣との調停に失敗した且元は、豊臣方の中で難しい立場に追い込まれていきます。

また、権力が完全に一元化されず、徳川と豊臣の二重権力が存在する状態は、政治学的に見れば非常に興味深いものがあります。

仮に秀頼が参勤交代するか、淀殿を江戸に人質に出すという条件を豊臣方が呑んでいたなら、二重権力状態が実質的に解消され、豊



大阪城

臣家は存続できたでしょう。

家康と秀忠の間には、そうしたコンセンサスがあったと思えます。千姫を豊臣秀頼のもとに嫁がせて、秀頼を秀忠の娘婿にしたのですから。

加賀の前田と全く同じ構図です。謀反の疑いをかけられた前田利長は、母を人質に差し出し、秀忠の娘（千姫の妹）を前田家に迎えました。前田家は、御三家と同格の扱いで存続を許された。豊臣家も徳川格別の家として優遇されて残った可能性が高いでしょう。

しかし、淀殿は和睦の条件を受け入れませんでした。

秀頼単独であれば受け入れる余地はあったと思います。何と云っても、秀頼は現実の力関係を知っていたでしょう。豊臣恩顧の大名と言っても、はたしてどれほど頼りになるのかということも。

封建領主にとって大変つらい選択も、必要とあれば受け入れなければならぬ。当時、家を守るとはそういう覚悟だったのです。

くカトリック信仰が浸透していま

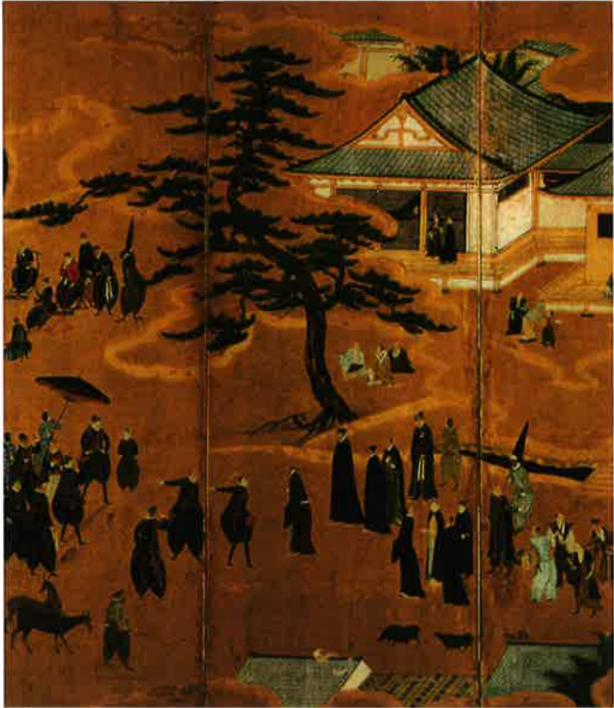
した。彼らの最終的な忠誠心がどこに置かれるかは決して小さな問題ではありません。

現代のように、平和で政教分離が成り立っている時代であれば、「信仰は別として、私たちは日本人ですから日本の領主様に従います」と言うでしょう。しかし、世界的には決して平和な時代ではなく、ローマ教皇庁は、世俗の君主たちにも非常に大きな指揮権と

政治権限を持っていました。

大村純忠が長崎の土地をイエズス会に提供したことがありました。インドのゴア、中国のマカオ、

現在の東ティモールもポルトガルが植民地の拠点としました。日本も全土とは言わずとも、一部の地域がゴアやマカオ型の植民地とされる可能性は十分にあったでしょう。秀吉の時に、それを未然に拒否した。徳川政権もその点に関しては忠実に継承しました。



南蛮寺

## 幕府の体制を固めた秀忠、家光

### 除封や改易を断行した二代将軍秀忠

家康の六男で秀忠の弟、松平忠輝は伊達政宗の娘婿でもありました。忠輝と政宗が組んで反逆を起すのではないかと。外様大名が加担して反江戸連合が作られる可能性がある。秀忠が一番恐れた構図だったと思います。元和2年（1616）には、忠輝を除封しました。

また、松平忠直は、家康の次男結城秀康の長子です。秀忠にとっては甥。その忠直が、やはり、本多正純と組んで謀反を起すのではないかと疑われた。元和8年（1622）、本多正純を改易、翌9年（1623）には、忠直を流刑に処しています。

その他、福島正則や最上義俊といった大名も減封されています。幕府を守るためには、除封や改易が必要だと秀忠は考えたのでしよう。せっかく統一した天下を

また戦乱の世に戻してはならないという責任感もあったと思います。

### 三代将軍家光の外交政策

家光は、オランダとの交易は認める一方、キリスト教の布教を進めたポルトガル人を追放しました。当時の世界情勢を考えれば、スペイン・ポルトガル帝国の存在は無視できない。ローマ教皇庁も同様です。中南米やインドでも宣教師は植民地化に大きな役割を果たしました。

困ったことに、日本の中には大名から商人、農民に至るまで幅広



著書『将軍の世紀』(上下巻 文藝春秋)

## 五代将軍綱吉の多面性

### 柳沢吉保を頻りに訪れた綱吉

綱吉は、寵臣や大名の屋敷へ頻りに「御成」を行いました。なかでも、側用人の柳沢吉保邸への御成は実に58回と群を抜いています。柳沢邸を訪れた綱吉は、家臣に警護されて屋敷を抜け出し、庭や路地を通ってさらに別の屋敷を訪れることもありました。御成の御成です。

柳沢吉保は、將軍の意を受けて容姿や教養に優れた男子を邸内に抱えています。それが衆道の相手か否か。断定するための確証を得ることは困難です。しかし、綱吉と吉保に詳しい学者は、綱吉の男色癖を否定していません。

### 社会的見方の重要性

綱吉という人間の理解に欠かせない要素は、第一に彼の学者としての知的な側面。第二に芸術的な感性の鋭さ。能楽に対しては、異常なほどの関心を持っていまし

た。そして、第三がセクシャリティーの問題です。オーソドックスな通史に書かれることはまずありませんが、こうした社会的アプローチは、政治家や人間の理解には欠かせない部分だと考えています。



綱吉靈廟勅額門



### 六代將軍家宣、七代將軍家継を支えた新井白石

#### 稀代の儒者政治家・新井白石

六代將軍家宣は、48歳で就任しましたが在職4年で他界しました。七代將軍家継は、僅か8歳で夭折しています。この間の政治を支えたのが、老中間詮房と儒者の新井白石でした。新井白石が行った政策のなかでは貨幣政策との関連で、長崎貿易と朝鮮貿易への対応が注目されます。

#### 正徳新令と清の康熙帝

当時、長崎での清とオランダとの貿易の結果、日本の金銀銅が大量に海外に流出していました。白石は「正徳新令」により中国、オランダの来航船数を抑え、銀と銅の取引高を制限します。さらに、密貿易を防ぐために、信頼できる中国船に対してのみ「唐通事」（唐人の通訳）から「割符」を交付させることにしました。

これに対して、貿易を制限された清の地方有力者が、「徳川幕府

の行為は清国の主権を損ねるものだ」と訴えます。

しかし、清の康熙帝はこの訴えを退けるのです。割符はあくまで出先の当事者たちの便宜的な整理札であって、徳川幕府の公的な行為ではない。「自分たちも似たようなことをやっているではないか。いたずらに日本を刺激するのはやめよ」という裁定だったのです。

「唐通事による割符」というかたちを整えたいという新井白石の真意を康熙帝は正しく理解したのです。「サイレント・ディプロマシー」の一つの典型で、これは洗練された外交なのです。同時代の康熙帝、徳川吉宗、新井白石はいずれも大度量の政治家でした。

#### 朝鮮貿易と雨森芳洲

対馬の宗氏は、対朝鮮貿易で成り立っていました。銀の輸出統制を図る新井白石の政策は宗氏に

とって大きな打撃となりました。家存続の危機に立った宗氏は、白石と渡り合える「御学問の力」をもつ切札を投入しました。雨森芳洲です。木下順庵の門下だった二人は3回の会談をもちます。最終的に白石は芳洲に譲歩します。朝鮮との関係を考えた場合、宗家の立場を貶めることになれば、結局、將軍家や日本の立場を軽し

めることになる。一流の文人政治家同士には、將軍対大名というレベルを超えた大局観があったのです。

白石は芳洲に老中と折衝するコツやツボも教えています。彼は公儀高官の一部から「鬼」と畏怖されましたが、学者として理の立つ芳洲には敬意を表したのです。



新井白石 (早稲田大学図書館蔵)

### 八代將軍吉宗と御三卿

#### 紀州徳川家から出た將軍吉宗

幼少の七代將軍家継が8歳で亡くなると、徳川御三家の中から紀州徳川家当主の吉宗が八代將軍に就任します。家康が作った「御三家」の仕組みが機能したわけです。家康は、信長や秀吉をよく見ていました。一代で作った権力がいかに簡単に滅びるか。血縁者が沢山いるだけでは駄目なのです。制度としての地位継承の正当性、「家」として常に輝いている存在でなければ、人々は正統な血として認めない。そのことを肌で感じてきました。

信長は、結局後継者を作ることには失敗しました。秀吉も、自分で血縁者を粛清し、秀頼以外の選肢股がなくなるところまで追い込まれてしまった。家康は恐らくそれを見ていて「御三家」を作ったのです。非常に危機感を持っていたと思います。天下人になってからできた晩年の子供、義直（尾張）、

頼宣（紀州）、頼房（水戸）に帝王教育を授け三家を立てたのです。

二代將軍秀忠の血は、七代將軍家継で断絶してしまいます。そこで、初代家康に戻り、その血を継ぐ吉宗が徳川將軍家を継ぎました。家康の目論見は成功したので

#### 御三卿を作った吉宗

吉宗は、御三家の実情をよく知っていました。紀州家、つまり吉宗の血だけで権力を繋ぐことを決意します。そこで、長子家重を九代將軍に据える一方、二男以下を当主として田安家、一橋家を立てた。さらに、吉宗の孫を当主として清水家ができたのは九代將軍家重の時ですが、これも吉宗の意志によるものです。この三家が「御三卿」。將軍の後嗣がない場合は、後継者を提供する役割を担ったのです。この仕組みが働き、十四代將軍家茂まで繋いだわけです。



吉宗公 (徳川記念財団蔵)

ただし、血筋というのは不思議なものです。吉宗の三代後、十一代將軍家斉はあれだけ沢山子供を作ったのに、(53人うち男子26人)養子など外に出した子供が後継者として話にはならない。御三卿か御三家でない駄目なのです。家斉の血は、十四代家茂で絶えてしまいます。近親継承の難しさで

すね。そして、最後の十五代將軍慶喜は、家斉が忌み嫌っていた水戸藩主水戸斉昭の子供です。彼を一橋家へ養子として入れることにより、かろうじて御三卿の理屈を成り立たせたわけです。

(後編に続く)